

er音史小考

中村雅之

1. er音の成立

唐作藩(2000:pp.88-90)¹によれば、er音[ɛ]の成立過程は次の通りである。

「児」は宋代までは[gi]であったが、元代には[zi]となり、現代の「日」と同様の音になった。一方、「日」は元代にはまだ[gi]であった。これは『中原音韻』で「児」が「支思」韻に属し、「日」が「齊微」韻に属することから分かる。「日」が[zi]になる頃には、「児」はすでに[ɛ]になっていた。北京語で[ɛ]音が現れるのは遅くとも明代後期(16c.末～17c.初)で、徐孝『重訂司馬温公等韻図経』(1606)は「而爾二」を影母に収めており、ニコラ・トリゴー(Nicolas Trigault)編の『西儒耳目資』(1626)は「而児爾耳二貳」などを「ul」と表記している。

以上のうち、『西儒耳目資』を北京語の資料とする点にはやや問題があるが、er音の成立についてはほぼ要を得ていると言ってよからう。唐氏はさらに、14世紀の『遼史』や『元史』に見られる「畏吾児」(ウイグル)、「可失哈耳」(カシュガル)などの音訳で、「児」「耳」が音節末にしか用いられないのも[ɛ]音の反映だとするが、この点はおお十分な検討を要する。

2. 「児／耳／二」などの官話音

明代の官話が南京音を主たる基礎として形成されたことは近年ほぼ共通の理解になりつつある。それを引き継いだ清代の官話も(少なくとも19世紀初までは)同様の性格を持っている。その官話では、「児／耳／二」は一般にer音では表されない。

1580年代にマテオ・リッチ(M. Ricci)とミケーレ・ルッジェーリ(M. Ruggieri)によって作成された「賓主問答私擬」では「爾／耳」などは「gi～gii」という表記であり(古屋昭弘1989による)²、1857年にジョゼフ・エドキンズ(J. Edkins)が著した『官話文法(A Grammar of the Chinese Colloquial Language, commonly called the Mandarin Dialect)』では「ri」と表記されている。さらに南京官話音を参考にしたと思われる瞿秋

1 唐作藩(2000)『普通話語音史話』, 北京:語文出版社。

2 古屋昭弘(1989)「明代官話の一資料——リッチ・ルッジェーリの「賓主問答私擬」——」『東洋学報』70-3・4。

白『中国拉丁化的字母』(1930)でも「re」である³。要するに、リッチらが広東で学んだ官話でも、エドキンズが記した南京の官話でも、さらには中国語のローマ字化を図った瞿秋白の表記でも、er音は用いられていないのである。例外は『西儒耳目資』とその表記を踏襲したフランシスコ・ヴァロ(F. Varo)の『官話文典(Arte de la lengua Mandarina)』(1682執筆、1703出版)である。

3. 『西儒耳目資』の「ul」

『西儒耳目資』は主に南京音によりつつも、同時に北方の官話音をも参考にしている。巻首の撰述者の隣に「晋絳韓雲詮訂」とあるのも、それを物語る。例えば、果摂一等合口の「果／過」などに対して、(南京音の)「ko」と(北京など北方の)「kuo」の双方の音を与えられているのは、その状況を如実に示す。そして「児／耳／二」などを「ul」と表記するのも、南京音に拠らずに、北方の音に拠ったものと理解すべきであろう。

リッチらの「賓主問答私擬」と『西儒耳目資』の表記上の大きな相違点として、古屋昭弘(1998:p.156)⁴は、「賓主」で混同されていた-n韻尾と-ŋ韻尾が『西儒』で区別されること、そして「賓主」の「gi」から『西儒』の「ul」に変わったことを挙げるが、後者を「表記だけでなく中国側の音韻変化によるもの」と言うのは誤解を与えるであろう。時代的な音韻変化というよりは、南京音およびその亜種としての南方官話と、北京を中心とする北方音との違いとして捉えるべきで、『西儒耳目資』はこの点に関して北方音を採用したと見るのが妥当であろう。

歴代の西欧宣教師たちが南京音を最も標準的と見なしたこと、声調体系やその調値に南京音との一致が見られること(cf. 古屋1998:pp.157-158)などから、『西儒耳目資』も南京音を基礎方言としたと言い得るが、細部においてはいくつか北方の発音が登録されているのである。

4. 「西字奇蹟」の「lh」

マテオ・リッチが広東から北京に移った後、1605年に作ったローマ字注音の文語文「西字奇蹟」(『程氏墨苑』所収)では、問題の表記は「lh」となっている。この風変わりな表記は、北京人のer音をなんとか表記しようとしたものであろう。広東では「gi」としていた表記を北京では「lh」と変えねばならなかった。それほどこの発音に南北の地域差が

3 cf. 中村雅之(2006)「ラテン化新文字は山東方言か」『KOTONOHA』48.

4 古屋昭弘(1998)「明代知識人の言語生活---万暦年間を中心に---」『現代中国語学への視座---新シノロジー・言語篇』

あった訳である。

なお、瞿秋白の表記を修正して北方風に改めた蕭三編集『拉丁化中国文字拼音和写法的参考書』(1932)の表記では、瞿秋白の「re」を「r」に改めている。リッチは「lh」とし、蕭三らは「r」とした訳だが、この二種の表記には興味深い共通点と相違点がある。共通点はともに母音を表記しないことで、er音の出だしが曖昧な母音であったために無表記にしたものであろう。相違点は子音を一方は「l」とし他方は「r」としたことで、これは表記の際に(無意識に)参考とした言語の性格によって生じた相違である。リッチの親しんだイタリア語など南欧語では「r」はふるえ音であり、er音の表記には不向きであった。一方、蕭三らが思い描いた「r」は英語風の持続音であったと思われる。リッチはer音の持続音的な性質から「l」を用い、かつヨーロッパ語の[l]とは似て非なる音であることを示唆するために「h」を付して「lh」という表記を作ったのである。清代満洲文字による表記が「el」であることを考えても、er音に「l」を用いるのはそれほど突飛な発想ではない。リッチという一人の人物が、広東にあつては「gi」を用い、北京では「lh」と表記したという事実は、そのみでも1600年前後の南北におけるer音の状況を語るに十分であろう。